

# 時空の漂泊

(二〇二一年六月二十九日 第六十六号)

高橋 滋

## 広島・里山便り (六)

廿日市市津田(佐伯)の園地に通うようになって八シーズン目に入っている。毎年、六月初め頃に出かけるときには胸ときめく思いがする。

それはササユリ(笹百合)とコアジサイ(小紫陽花)が小屋のすぐ近くで、ほとんど同時に咲くからである。



六月五日に出かけた時は、昨年「里山を歩こう」で紹介したのと同じ株のササユリ(笹百合)が、去年と同じように花をつけていた。

六月十一日、去年は二つしか花をつけなかった別の株のササユリ(笹百合)が、四つの花を咲かせていた。

重たくて、自分では立ってられないほどである。

ササユリ(笹百合)は、細い茎が一本立ちあがって、普通は頂上に一つか二つ花をつける。葉は名の通り、笹に似ていて細くて数が少なく、生活力の弱い植物である。しかし、花は大きく斑点がなく横向きに咲いてすっきりしている。香りもある。

ガーデニングの本場、イギリスから来る園芸家は日本の野草を見て驚嘆するらしい。



カラフルで、ナチュラルな花々が咲き揃う信州の高原などは、「これ以上のガーデンはない」という思いを抱かせるようだ。

日本には、山ユリ、鹿の子ユリ、鉄砲ユリ、スカシユリ(透百合)など園芸品種のものになったユリ類が十五種あり、自生している。最近ではタカサゴユリ(高砂百合)が高速道路の法面などにたくさん群生している

のを見る。やや大きな、ちょっと繊細さに欠ける、ウバユリ（乳母百合）も増えてきているように見える。日本の風土にはあっているのではあろう。

その中で、ササユリ（笹百合）は、「野に咲くユリでこれほど清楚で美しいものを私は知らない」といった人もいるほど素晴らしい。しかし、栽培はなかなか難しいらしい。だから商品としてはほとんど市場に出ない。種子はたくさんできるが、親株の周辺が増えてゆくということがほとんどない。

ササユリは、リリウム・ジャポニカム、日本のユリである。名前が固有種であることを誇っている。

広島ではこれをヤマユリと呼んでおり、初夏の風情になっているが、目にすることは少なくなってきた。

### アジサイ（紫陽花）

アジサイ（紫陽花）の仲間には世界で七十〜七十五の種類があり、その多くは中国、朝鮮半島、日本に分布している。

アジサイの英語名・学名はハイドランジア・ヒドランジア (Hydrangea)。その意味は「水の容器」。その名の通り水分を好み、樹木にしては新しい組織は柔らかく、強い光には弱い。寒さにも弱い方である。

雨が多くて、樹冠 (Crown) 茎、葉、花などを含む地上にある植物の部分の重たい樹林が育ちやすい気候帯、ヒマラヤから中国南部、東南アジア北部につながる、いわゆる照葉樹林の環境と相性が良いのではなからうか。

なお、アメリカ合衆国にも照葉樹林帯がある。フロリダ半島一帯である。最近、流行になっているカシワバアジサイ（柏葉紫陽花）は、数少ない北米出身で、原種の産地は

「アメリカ東南部」とされている。アラバマ、ジョージアからフロリダにかけての地域で、照葉樹林帯と一致している。

われわれがアジサイ（紫陽花）と呼んでいる手毬状の花を咲かせる品種は自然のものではなく、ガクアジサイ（額紫陽花）の変種である（自然にできたものを園芸化したという考えもある）。

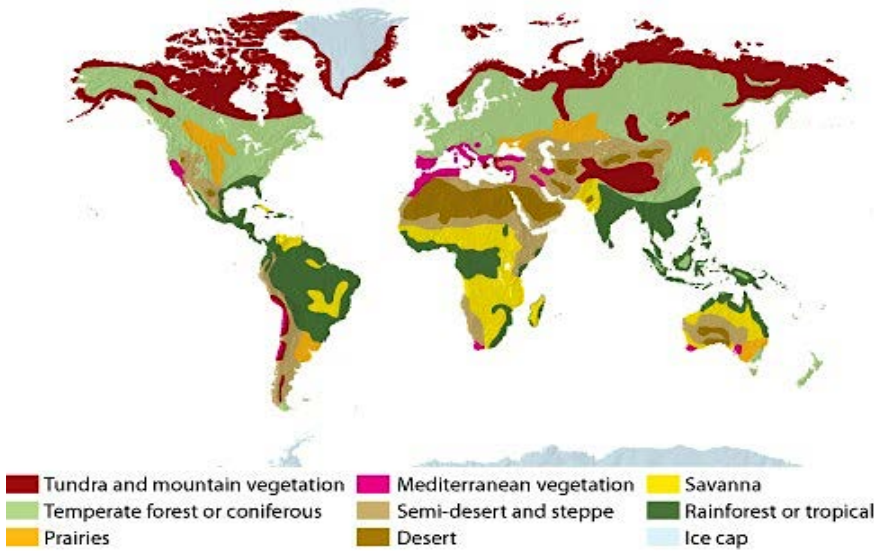
十八世紀には、中国、日本で栽培されていて、それがヨーロッパ（イギリス）に持ち込まれ、さらに改良され、西洋アジサイと呼ばれて逆輸入された。それが普通にアジサイ（紫陽花）でとある。大柄で花の色が派手なアジサイ（紫陽花）である。

江戸時代、長崎・出島に滞在し医療と博物学研究にあたったドイツ人医師・博物学者のシーボルトがオタクサ（お滝さん）と名付けてオランダに帰った後、発表したとい

<http://ja.wikipedia.org/wiki/アジサイ>

## Vegetation

Types of vegetation around the globe



う話が有名だが、それ以前に原種であるが  
 コアジサイ（額紫陽花）の学名が発表されて  
 いて、現在はオタクサの名は使われていな  
 い。

ササユリ（笹百合）の近くに、アジサイ（紫  
 陽花）の仲間である、コアジサイ（小紫陽花）  
 が咲いている。

コアジサイ（小紫陽花）は、その名通り花  
 が小さい。それもアジサイに特徴の「装飾  
 花」（雌しべ・雄しべが退化し、萼がくなどが花卉のよ  
 うに発達したもの）ではなく、本物の花（正常



花）が集まったものである。装飾花がないと、  
 アジサイには見えないが、アジサイである。  
 種ができるので、たくさん増える。

コアジサイは花の色味が独特である。普  
 通のアジサイのように明るい青ではない。  
 花の塊の数が多く、水平に展開する。葉は  
 薄くて軽快で色も明るい。単独の花もなか



なかの味がある。しかも、これは、日本の固有種である

また地味だが、コガクウツギ（小額空木）もたくさん咲いている。これもアジサイである。装飾花がややまばらで、色も純白ではないので、人気はいま一つだが、繁殖力があるのか、多くみられる。小さな葉と花を水平に広げ、日の当りの悪い林の足元を明るくしている。しかし、関東以北では見られないようだ。

こういうものが、身近に実に無造作に咲いているのは、本当に信じられない感じがする。

どうといった特徴のない中山間地の、なんとということのない林縁である。水分がやや多く、日の当たり方も微妙だが、それでも普通のところだ。そんなところで、珍しい花をたくさん観察することができるのである。

あたりを見回すと、初夏らしい、白い、木の花が目立つ。山間部全体としては珍しいものではないが、ヤマボウシ（山法師）を

小屋の近くでは初めて見た。白く見えるのは本当の花ではなく、「総苞片」と呼ばれるものである。苞とは蕾を包んでいた葉である。今年はヤマボウシ（山法師）の花の付きが良いという人が多い。山間部を自動車で走ると、真っ白になっている木を見かける。苞のサイズも大きいように思う。

ヤマボウシの樹形は、一株の地際から茎が三本以上立ち上がって樹形を形作る「株立ち」であり、あまり大きく育たず、幹も花も美しく、新緑も紅葉もきれいと欠点がなく、最近の生け垣がなく、庭が道路に直接開いているタイプの家では大変好まれて

いる。私も小屋に主木として植えている。夏は

日陰を作り、秋は出窓の外側で紅葉して季節感を演出する。

もう一つイワガラミ（岩絡み）を初めて見つけた。蔓性のものだが、ツルアジサイ（蔓紫陽花）が木に這い上がって行くのに対して、イワガラミ（岩絡み）は木の根元に蹲って



調べたらアジサイ科 (Hydrangea) ではあるもののアジサイ属 (Hydrangea) ではなかった。アジサイ科イワガラミ属 (Schizophragma) であった。

但し、「属名」+「種小名」<sup>しゅしょうめい</sup>で構成される、いわゆる「二分法」での「学名」は「Schizophragma Hydrangea」で、その生物



<http://www.geocities.jp/cosmopolter/maritrinio/koren/garden/nanubakiku/unobana.html>

の特徴を表すラテン語の形容詞の「種小名」<sup>しゅしょうめい</sup>の「Hydrangea」(ヒドランジア) はアジサイのようなという意味である。

イワガラミ(岩絡み)は台湾などにも生育するが、海外の園芸のホームページでは、普通、「日本のツタになるアジサイ」と呼ばれている。六月になると葉が濃くなると、白い装飾花が目立つようになる。

ウツギ(空木)も、この時期の定番だが、今年は花の数が多い。枝が垂れるほどに花を付けている。梅雨模様の中に白く浮かび上がって、多くの虫を呼び込んでいる。

ウツギは「卵の花」とも呼ばれ、この時期の代表的な花である。

昔の人は「卵の花くたし」という表現を使ったが、最近ほとんど耳にしない。「くたし」は「腐たし」で、「卵の花」も腐さってしまうような長雨という意味である。

子供の頃の歌

卵の花の匂う垣根に  
ホトトギス、早も来鳴きて  
忍び音もらす、夏は来ね  
.....  
.....

が口をつく。



今年ホトトギスの在住が長い。カッコ  
ーはどこかへ行ってしまったが、ホトトギ  
スは「トツキヨ キヨカキヨク」「特許許  
可局」と、ずっと大声を出して鳴いている。

**ニンニク、馬鈴薯、辣蕪**

五月が植物の生長の季節だとすると、六  
月は植物の成熟の季節となる。

玉葱は季節外れの台風の影響で、六月初  
めに育ちきらないうちに倒れてしまった。

玉太りはいま一つだった。四月の寒さの影  
響も大きい。

しかし、ニンニクは大豊作だった。サイ  
ズも大きく、これだけたくさんとれたのは  
初めてである。採れたてを炒めて食べると、  
刺激も少なく美味しい。

六月末には、馬鈴薯も収穫した。育つ期  
間が長かった分、例年よりサイズが大きい。



品種は「キタアカリ」。前作の余りを植え付  
けており、三代目か四代目になる。今年は  
「ニシユタカ」を半分ほど植えた。十mの  
基本区画に四十個程度の植え付けで、二ヶ  
月ほどの自給になるのだろうか。

馬鈴薯はお店で買えるし、場所を塞ぐの  
で、栽培を厭う人もいる。一年に二作で、



年中塞ぐことになる。それでいてローテー  
ションを要求する。しかも、種子で育て  
るものと比較すると収穫の「倍率」も低い。  
しかし、それでも一株から五〜六個は採れ  
る。立派なものである。

辣蕪もたくさん採れた。辣蕪は植え付  
けて1年目に、この写真の大きさになる。

そして、そのままもう一年置くと、分玉し、  
 小さな辣蕪らつきょうがたくさんとれる。  
 我が家では数少ない「完全自給品」である。花崗岩系の土質が向いているのか、手間いらずで、間違いがない。



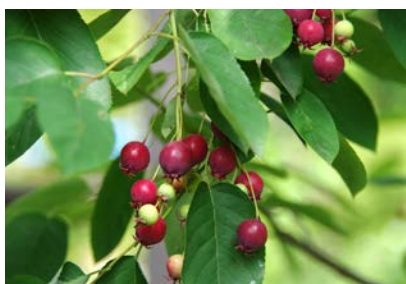
庭の片隅で、何の手も掛けずに育った蕪いもちも年に一度の恵みを与えてくれた。これはほとんど野生化している。

木苺類きいちじは、道路の縁へりの明るい所になっている。たくさん採れるが、棘のある枝が嫌でサンプル程度しか採らなかつた。

ジュンベリーも実を付けた。ザイフリボク（采振り木）の仲間で、アメリカザイフリボクとも呼ばれている。

耕地が家から遠くにあるとき、耕地の近くに寝泊まりして耕

作すること。



葉と同時に、白い花をたくさん咲かせる。何回か植え付けたが、幹に入る虫にやられて、枝が枯れることが多かった。この木も植え付けて五年になる。途中で枯れかけて再生し、ようやく実をつけた。色も濃いですが、味もなかなか深いものがある。

一月に整備した志和の山には梅を植えている。毎年六月中旬、実を採りに行く。今年には、花の付きが悪く、収穫が少なかつた。

その代わりに八本松の旧宅あんずの杏がたくさん採れた。これは店子の了解を得て、庭先を使って栽培を行っている。いわゆる「出作り」で二十七シーズン目になる。

だんだん手入れが億劫おっくうになり、柿と一緒に切ろうかなと思うこともあるが、まだ収穫の魅力には勝てない。家族の記録という気持ちもある。植えてから四十年になる。

今年の杏あんずの収穫は七・四キロであった。  
 ジヤムは酸っぱくてやや食べにくい、ヨーグルトに加えると、クエン酸効果なのだろうか、気持ちがピリツとする。無農薬、無添加の自然品の味である。



高橋 滋 広島県森林インストラクター・ 広島市里山整備士

1968年 東京大学工学部航空学科卒業

1968年 東洋工業(株) (現マツダ(株)入社)

以降、主として商品企画・経営企画部門。  
 電気自動車、都市交通システムの調査研究  
 中長期経営計画、商品計画

乗用車の基本設計、商品企画、商品開発主査などを担当  
 この間、1988～1991年、北米 R&D の副社長 として  
 商品企画・評価・人事・財務担当に従事。

2001年 商品企画ビジネス戦略本部副本部長を最後に早期退職

2002年 (財) 広島市産業振興センター ・

中小企業支援センタープロジェクトマネジャーに就任

2008年 退職 現在、広島県森林インストラクター・ 広島市里山整備士として活動中。

<http://www.sml.co.jp/Support.html>